



Launched 1969

宗教部報

リカニム





— 宗教部報 りゅうこく No.111 目次 —

巻頭言「思春期・青年期の子どもも家族も、いろいろあります」… 吉川 悟 ……	1
伝道部朝法話「選び取らない阿弥陀さま」 ……	玉前 惟 …… 5
植物伝説でたどる親鸞聖人の足跡 ……	部矢 祥子 …… 8
連載「《イケズ》と《気遣い》のはざまで —京ことばの心髄にせまる—」 ……	泉 文明 …… 15
職員数珠つなぎ「提灯行列とご縁を振り返る」 ……	冨塚 康幸 …… 18
仏教パズル ……	(出題) 小川 信正 …… 23
法要・行事の振り返り ……	25
表紙写真解説 「慈悲のまなざしを通して他者と出会う」 ……	俵山カレンリー …… 32
BOOK GUIDE ……	40
編集後記 ……	47
裏表紙 阿弥陀様を探そう！	

裏表紙作成 小西智子

言 頭 卷

思春期・青年期の子どもも家族も、
いろいろあります



吉 川 悟
(心理学部)

臨床心理相談という仕事を生業としてから、すでに四十年を過ぎようとしています。若い頃にはあれこれと、精神医療や教育だけではなく、いろいろな専門領域にかかわってきました。そして、それぞれの領域ごとの専門性と実践的活用のも多様性に驚きつつも、その違いが面白すぎて、手を広げていった記憶があります。

また、心理的問題にかかわる相談の中でも、主流ではない、あまり触れられていない「人間関係が関わるややこしい相談」の世界に身を置いたため、特別なエピソードも山積しています。そのいくつかは、私にとって「本当に良い勉強をさせてもらった」と心から思っている「できごと」として残っています。その中から話題を取りだし、少し斜めから眺めてみると、世間一般とは異なる視点からの見え方があるので、それをお伝えしてみたいと思います。

まず、どのような相談で来られたとしても、最大の関心事は「早期の問題解決」を期待されている場合が多いと思います。対応する

セラピストは、これまで用いてきた方法で、少しでも有効性のある結果を生み出すため、短期でかつ再発の可能性が少ない対応を検討します。ただそう易々とは行かないことが多いのです。それは、人がそれぞれにいろいろな考え方や感じ方、受け止め方をする違った存在だからです。その上家族という集団の中では、集団内の見えないルールに準じて行動することが求められており、もしかすると本人の本当の思いかどうか、わからなくなることもあるのです。

ある家庭内暴力の男子中学生の相談がありました。すごく優秀な営業職の父親に対して、手加減のない暴力が繰り返され、専業主婦の母親に対しても、父親ほどではない程度の暴力が頻発していました。鬱状態になった父親の病院回避や、子どもに対する福祉的対応も取られましたが、一時的な改善に留まっていたため、ご相談に来られました。その初回の同席面接の場面でさえ、一触即発のにらみ合いや暴言が飛び交う、凄まじいまでの雰囲気ではまりました。

そこから毎週五回程度の働きかけを繰り返し、父子間の暴力はなくなり、息子は「再登校したい」とまで語るようになりました。加えて、休職中の父親が土木現場のアルバイトに出るまでになり、息子も間欠の登校をはじめていました。その第八回面接の冒頭、母親が悲壮感を漂わせ、「先生、とんでもないことを言うようですが、耐えられません。こんな劇的な変化に、私は耐えられません」と泣き崩れました。父親は母親の肩を抱きつつ「息子も私も、先生のおかげでこんなに望んでいた日々を過ごせるようになりました。でも、彼女はその変化の早さに戸惑い、困惑し、どう対応すべきかわからず、耐えられなくなっているのです」と。

私にできることは、「謝る」しかありませんでした。こうなることを初回の面接で望んでいた母親が「耐えられない」とまで訴え、

泣き崩れさせてしまったのは、私の所業以外何ものでもありません。心理療法的対応を最も有効にするには、目の前の相談者たちごとの異なる要請に準じて、オリジナルな対応をすることです。しかし、その効果の程度は、「早く改善すれば良い」だけなのではないと、初めて教えてもらった思いがします。

その後、母親に変化のペースを確認しつつ進め、数ヶ月後に着地点までたどり着きました。その終了面接で母親は「あのときのしんどきは、一生忘れないと思います、良い意味ですけど」と笑って話してくれました。

ある女子高校二年生の訴えで、対人関係の不調が繰り返されていると相談がはじまりました。いろいろ話をしているうちに「実は……」と話し始めたのは、クラスのある女生徒が大好きなのだが、そんなことが相手や周りにわかってしまうと、ドン引きされる。母親に話したら「変な子やね」と言われて相談できない。それがすべての原因なのだと。私は、話を聞きつつ不思議そうな顔をしながら、「なんでドン引きされると思うの？」と尋ねると、「これって、同性愛傾向があるってことだし、そんなことで相手から嫌われたら、死にたくなる」とまで話してくれました。

そこで、「それはそれで今のあなたにとって、とても大事な思いだから、ヘンかどうかはどうでも良いと思う」と伝えました。それを聞いて「でも……」と戸惑う彼女に重ねて提案したのは、『秘めた愛を育む』というテーマでした。これに大きく賛同した彼女は、そこから当該の女生徒との接点をどう自然に作るか、誰にも話せない思いを秘密のノートに書いて発散するなど、約一年半盛り上がりのある会話が続きました。

卒業の二ヶ月前、彼女が面接室に入ってきて、珍しく落ち込んだ

ような様子をしていました。いつもと違う雰囲気なので「どうした？」と聞きました。すると、ぎこちない素振りて身を振りながら、「あの、よくわからないんですけど、彼氏ができました」と恥ずかしそうに、照れながら、微笑みながら話してくれました。驚いて「どういうことよ？」と聞いてみたら、くだんの彼女と話している中で、彼女のお気に入りの男子生徒の話をしていて、なんとなくその男子に惹かれていったと。でも、彼女のお気に入りだからと、仲介役としていろいろ男子生徒と話すうちに、相手から告白されてしまい、付き合うことになったと。それを話したら、くだんの彼女も喜んでくれたそうです。

私が返せた言葉は、「良かったね」という一言でした。思春期の子どもたちにとっては、性的指向が確定的な人もいれば、曖昧なままの存在もあります。そして、成長過程でのよく起こる曖昧さに戸惑うことが少なくありません。その時点で断片的に他者から性差と性的指向について「どれなんだ」という確定的な枠組みを求められれば、そこに縛られてしまう危険があります。周りからの見られ方について悩んでいたのなら、その場で何かを決めるのではなく、判断を求めず、過剰評価も過小評価もしないまま、一旦歪んでいるかもしれない子どもたちの認知に基づく対応に合わせる必要があります。精神的成長に基づいて自らの性自認が転換していくことも、当たり前の一部だということを知っておいていただければと思います。

さて皆さん、こんなややこしい世界、少しは面白いなあと思っただけででしょうか！

伝道部朝法話（二〇二六年五月十四日）

「選り取らない阿弥陀さま」

玉前 惟

（真宗学科三回生）

御讀題「十方微塵世界の 念仏の衆生をみそなはし」

撰取してすてざれば 阿弥陀となづけたてまつる」

『浄土和讃』／『浄土真宗聖典―註釈版―』五七一頁



皆さん、おはようございます。私は伝道部三回生の玉前惟と申します。本日は「選り取らない阿弥陀さま」と題しまして、阿弥陀さまのおこころを共に聞かせていただこうと思います。

私、三回生になって「さすがに、ちよつと、太ったなあ」と悩んでいるんです。昨日体重を計りましたら高校時代からなんと十キロも太りまして、ようやく本格的にダイエットをしようと思いました。今までダイエットを始めては諦めて、気づいたら始める前より体重が増える、というループでしたので、「今回こそは」と思ってジムにも通い始めました。今朝はスーツを着ていますが、「ズボンのチャックが閉まるだろうか、シャツがはち切れないだろうか」なんて不安になり

ながら着替えていました（笑）。ダイエットを始める前は多い時で週に三回くらい二郎系ラーメンを食べていました。それを母に伝えるとき、「そりゃ太るわ!」と呆れられてしまいました。しかし今は、まず野菜から食べて、たんぱく質もしっかり摂る食生活を心がけているんです。でも、こうして振り返ってみると自分勝手な食生活をしているなあと思うのです。自分の食べたいもの・都合の良いものを食べたい時に食べたいだけ食べている。自分の都合で食べ物を「摂取」していると感じたんですね。それを考えると、すべて自分の都合でしか動けない、考えられない私であると思い知らされるのです。

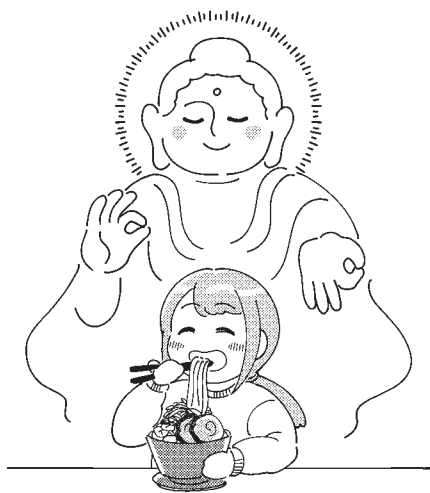
冒頭に拝読しました御讃題にも「摂取してすてぎれば」という言葉がございます。

十方微塵世界の 念仏の衆生をみそなはし
摂取してすてぎれば 阿弥陀となづけたてまつる

（『浄土和讃』／『浄土真宗聖典―註釈版―』五七一頁）

「十方微塵世界」つまりありとあらゆるすべての方向に塵のように存在している私たちのことを、阿弥陀さまはひとりひとりご覧になっておられます。そして自分の都合でしか生きられないと迷い、苦しむ私たちを余すことなく救って決して見捨てないのです。そんな仏さまを阿弥陀と呼ぶのだと申されているわけです。私が先ほど申した「摂取」と阿弥陀さまの「摂取」。漢字は同じですが、何が違うのでしょうか。

阿弥陀さまの「摂取」は全く選び取らないのです。そしてすべての人を救ってくださいます。一方私は、自分の都合の良いものばかり選んで、都合の悪いものは目にも入れない。そんな生き方をしているんですね。阿弥陀さまは「南無阿弥陀仏」と称える生きとし生けるすべてのものを救い、見捨てずにはおられないとおっしゃっています。日々「南無阿弥陀仏」と称える私たちはもうすでに阿弥陀さまの救いの中に入っているというわけなんです。どんなに私たちが苦しみ、迷い、悲しみに沈んでいるときも、阿弥陀さまはそんな私を追いかけて「ありのままのあなたでいいんだよ」とはたらかせてくださっています。そんな阿弥陀さまとともにお念仏申す日々を送ってまいりたいと思う限りです。



イラスト：宗教部 小西

植物伝説でたどる親鸞聖人の足跡

部 矢 祥 子

(本学非常勤講師)

京都市内の青蓮院、岡崎別院、月輪寺に「親鸞聖人お手植え」と伝わる左記の樹木があります。なぜこれらの地にあり、どのような伝説なのでしょう。

- ①クスノキ (青蓮院、東山区)
- ②ウメ (岡崎別院、左京区)
- ③サクラ (月輪寺、右京区)

親鸞は、平安末期の承安三(一一七三)年に日野(伏見区)で生まれました。①の青蓮院(最澄ゆかりの天台宗寺院)は、九歳の親鸞が、伯父の日野範綱(のりつな)に伴われて入り、慈円(じえん)(後に天台座主となる)を戒師として出家した寺です。

そうして比叡山に登り、厳しい修行と学問を積みました。しかし、二十年間にわたり修行を重ねても真実の救いは見出せず、二十九歳で下山しました。自身の進むべき道を求めて六角堂(聖徳太子創建と伝わる)に百日間参籠(さんろう)した末、「法然聖人の門に入り、専修念仏に帰依せよ」との夢告を得ました。

②の岡崎別院は、親鸞が下山して結んだ岡崎草庵の跡地にあたります。お手植えのウメは、一つの花がたくさんの実をつける「八房(やつふさ)

の梅」です。親鸞はこの草庵から、法然（六十九歳）が住む吉水草庵（東山区）へ百日間通い続けました。法然の弟子となり、五年後には主著『選択本願念仏集』の書写や法然の肖像画の制作を許されるまでになりました。

ところが三十五歳の時、承元の法難（後鳥羽上皇による念仏宗への弾圧）が起き、法然は土佐国（高知県。ただし九条兼実の配慮で讃岐国に変更）、親鸞は越後国（新潟県）へ配流されました。③の月輪寺は、法然・親鸞を保護した兼実の隠棲地です。サクラは、親鸞が法然や兼実との別れを惜しんで植えたと伝わり、四、五月に葉先から悲しみの涙を流すかのような雫を落とし、「時雨桜」と呼ばれています。

新潟県には、親鸞にまつわる植物伝説が多く伝わっています。当県は、親鸞が流罪され七年間を過ごした地です。以下に、伝説を持つ植物名と所在地、伝説の内容を簡潔にまとめます。

④タケノ逆さ竹（新潟市中央区鳥屋野、西方寺）

所持していた竹の杖を地面に挿して根付いたもの。枝が下向きに伸びる枝垂れ竹。

⑤クリノ三度栗（阿賀野市保田、孝順寺）

蒔いた焼き栗が生育したもの。一年に三回、花が咲き実をつける。

⑥ウメノ八房の梅（阿賀野市小島、梅護寺）

蒔いた梅干しの種が生育したもの。一輪の花が八つの実をつける。

⑦サクラノ数珠掛け桜（同右）

桜の枝に数珠を掛けて仏法を説いたため、花柄かへいが長く垂れ下がり、花が数珠のように連なつて咲く。

⑧ **カヤ** Ⅱ **繋ぎ榎**つなぐがや（南蒲原郡田上町、了玄寺）

蒔いた榎の実が生育したもの。実に糸を通したような穴があるのは、年貢の代わりに糸で繋いで納められた実だったから。

⑨ **アシ** Ⅱ **片葉の葦**かたはあし（上越市五智、居多神社）

通常の葦は葉が左右に互生するが、この葦は葉を片側にのみつける。

⑩ **イチヨウ**（長岡市寺泊、西生寺）

イチヨウの杖を地面に挿して根付いたもの。

新潟県には「越後七不思議」があります。そのすべてが親鸞に關わるもので、そのうちの六つが上記④～⑨です。

居多こたがはヶ浜はまに上陸して最初に参詣したのが⑨の居多神社とされ、早期の赦免と念仏の興隆を祈願すると、アシが片葉になったと伝わっています。また⑩のイチヨウは、樹齡八百余年の巨木で、氣根が多く垂れ下がり「乳銀杏ちらいよう」と呼ばれています。親鸞おんろうが寺を去る際、「我が代わりにこの地に留まれ」と、杖を地に挿したものと伝わっています。地に挿した杖が根付き大木になった話は、「杖立て伝説」と呼ばれています。

では、以下の各地にも植物伝説があるのはなぜでしょうか。

⑪ **イチヨウ**（茨城県下妻市、小島の草庵跡）

（茨城県東海村、願船寺）

(茨城県笠間市稲田、西念寺Ⅱ稲田の草庵跡)

⑫ スギ

(茨城県笠間市稲田、西念寺Ⅱ稲田の草庵跡)

⑬ ボダイジュ

(茨城県下妻市、光明寺)

(千葉県野田市、長命寺)

(神奈川県小田原市、真楽寺)

配流から五年後、法然(七十九歳)と親鸞(三十九歳)は赦免されました。法然は帰洛しましたが、翌年に逝去。親鸞は帰洛せず、二年後に妻子や門弟を伴って関東へ向かいました。

親鸞が新潟を去る時、⑨のアシが、彼の歩む南(関東)の方向へ葉を揃えて靡いたとも伝わっています。

常陸国ひたちらのくに(茨城県)に入り、最初に居住したのが小島おじまの草庵でした。

ここに三年間逗留した後、稲田へ移り二十年間布教活動を行いました。

⑬の光明寺の開基・明空みょうくうは、小島で布教中の親鸞に出会い門弟になりました。このボダイジュは、親鸞が小島から稲田へ移る際、記念に植えたものと伝わっています。

⑪の小島の草庵跡のイチヨウは、稲田へ去った親鸞を慕うかのよう
うに枝を北(稲田の方角)へ伸ばしたことから、「稲田恋しの銀杏いちょう」
と呼ばれています。

また⑪の西念寺(稲田の草庵跡)のイチヨウは、葉の上に実をつける不思議なイチヨウで、「お葉付き銀杏いちょう」と呼ばれています。これは、親鸞が実を葉に包んで蒔いたためとされています。⑫のスギは「御杖杉みつえすぎ」と呼ばれています。稲田に草庵を結んだ時、「衆生救済の宿願を果たそう」と誓い地に挿した杉の杖が根付いたものと伝

わっています。

①の願船寺にもお手植えのイチヨウがあります。開基は高弟の定信で、彼は稲田の親鸞を訪ねて弟子となり、親鸞の関東での教化を支えました。

稲田の草庵は、親鸞が妻子と二十年間過ごし、『教行信証』の草稿本を執筆するなど関東布教の拠点でした。

③の長命寺の開基は高弟の西念。彼は、越後流罪中の親鸞を訪ねて帰依し、共に関東へ移った人物とされています。ボダイジュは、親鸞が当地の念仏繁盛を願い、数珠のボダイジュの実を一玉、柳の葉で包み桑の葉で覆って地中に埋めたものと伝わります。

また③の真楽寺は、相模国（神奈川県）へ赴いた親鸞が、滞在して布教を行った寺とされています。この時、天台僧であった性順が親鸞に帰依し、寺は浄土真宗へ改宗したと伝わります。さらに、以下の各地にも親鸞の植物伝説があります。

⑭ サクラ （栃木県下野市、蓮華寺）

⑮ ボダイジュ （愛知県津島市、教津坊）

⑯ ウメ （岐阜県関ヶ原町、聖蓮寺）

⑰ カツラ （同上）

⑱ ウメ （滋賀県愛荘町、宝満寺）

⑭のサクラは、親鸞が植えたと伝わる樹齢八百年のエドヒガンザクラです。当寺には、親鸞が大蛇（嫉妬に狂った女の化身）に苦しむ村人を救った伝説も残されています。

⑮の教津坊は、親鸞の逗留を機に天台宗から浄土真宗へ改宗され、

ボダイジュは、この時植えたものと伝わっています。

⑯の聖蓮寺しょうれんじも、親鸞の立ち寄りによって真言宗から改宗されました。ウメは、樹齢七百余年の「八房の梅」です。親鸞が酒食の席で出された梅干しの種を、「末代の女人浄土往生の証に、一花八果の梅になるべし」と念じて植えた伝承が残されています。また⑰のカツラは「御杖おんつえの桂木かつらぎ」と呼ばれています。寺を出立する際、「枯木心なしといえども、親鸞ひろ弘めるところの弥陀の本願末世に盛んならば、この杖再び枝葉を出し、本願もろともに栄えるべし」と言い残し、桂の杖を地に挿したものと伝わっています。

愛知川えちがわの氾濫で足止めされた親鸞が、仮宿にしたのが⑱の宝満寺とされています。この時、紅梅こうばいを植え、寺は真言宗から改宗されたと伝わっています。

親鸞が京へ戻ったのは六十二、三歳の頃でした。そうして最初に入ったのが、②の岡崎草庵と伝わっています。⑭～⑱の伝説は、親鸞の東国から京への帰洛経路に沿うように点在していると言えます。

弘長二（一二六二）年、親鸞は、弟の尋有じんゆうや末娘の覚信かくしん尼らに看取られ、善法院（京都市中京区）にて九十歳で入滅しました。鳥辺野で荼毘に付された後、頂骨と多くの遺品が東国布教の拠点であった「稲田の草庵」⑪⑫に納められたと伝わっています。

①～⑱より、親鸞の「お手植え伝説」や「杖立て伝説」を知ることができます。栗・梅・銀杏・菩提樹の実を蒔き、所持した竹・イチヨウ・杉・桂の杖を地に挿しました。このうち栗は焼き栗、梅は梅干しで、これらを蒔いても本来は芽吹かず、地に挿した杖も通常は根付きません。これらが根付き大木に成長したというのは奇跡的

なことで、これは親鸞の教えがその地域に深く根付いたことを象徴的に示すものでしょう。

また、八房の梅や数珠掛け桜、片葉の葦やお葉付き銀杏いちようなどの変異植物を、親鸞が起こした奇瑞として語り継いできたことも、その地域で浄土真宗が篤く信仰されてきた証と考えられます。親鸞において植物の繁茂は、阿弥陀如来の本願がすべてのものに及んでいることの現れでした。

これらの植物伝説を通して、親鸞の京から越後、常陸、そして再び京への帰還の足跡をたどることができます。各地に残された樹木が、親鸞の布教の地図として今も機能していると言えます。

拙稿「木を植えた高僧たちの伝説―いつ、どこに、何の木を、なぜ植えたのか」（龍谷大学『国文学論叢』二〇二五年）では、親鸞を含む高僧四十八名、伝説百三十九話、樹種三十六種を見出し考察しています。併せてご覧ください。

京ことばの心髓にせまる

《イマジ》と《気遣い》のはざま



泉 文明

(国際学部教授)

第10回

祇園祭山鉾町の会話

今、京都の町は祇園祭の真っ只中、先祭と後祭の真ん中（令和八年七月二十日）にある。今回は、祇園祭山鉾町とその界隈の会話を中心に御紹介することにする。日本を代表する祭の一である祇園祭は、旧市街・洛中では、「祇園さん」とか「コンチキチン」とも呼ばれる。

京都では、一般に「祇園さん」とは八坂神社を意味し、「くさん」を略して、単に「祇園」と呼称する場合には日本有数の名花街を意味する。八坂神社の祭礼であることから、この祭のことを「祇園さん」とも言う（古くは、「祇園会」「祇園御霊会」と称し、神泉苑を発祥の地とする仏教行事であったことはよく知られるところである）。転じて「この簾まきを換えた人は、いつの頃どしたいな？」（この簾を換えたのは、いつの頃でしたっけ）「そやな、おとしの祇園さん（祇園祭

の頃」とちごたかいなく（そうだな、おとしの祇園祭の頃じゃなかったかな〜）という具合に時節を表す代名詞ともなっている。また、「来週のゼミ会、六時半に祇園さんの前に集合やて。（来週のゼミ会（ゼミコンパ）、六時半に八坂神社石段下の前に集合だって。）」という具合に場所や位置、方角を表す代名詞ともなっている。

「コンチキチン」は祇園祭の祇園囃子の鉦の音色を表すオノマトペであるが、その音が複雑に入り組んで聞こえる印象から、京ことばでは、「混乱してる」とか「こんがらがってる」とか「ごたごたしてる」や「意味不明」・「理屈が合わない」「矛盾している」という意味合いでも用いられる。もともとの意味合いとは別に、日常の京ことばの中では、このような状態を表す比喻表現として用いられることがある。

山鉦町周辺は、今も京ことばが色濃く残るエリアの一であるが、祇園祭期間中の町衆の会話の中には、これぞ、京ことば!!京文化!!と思わせる遣り取りが見られる。

例えば、北観音山と南観音山の「山建て」の頃には、「真松選び」という儀式が現存する。両観音山から三名ずつの役員が出向いて、新町通蛸薬師角（北観音山と南観音山の間中点接点）で儀礼を交わす。ここで、じゃんけんをし、藁縄の籤（くじ）を引いて、どちらが先に真松を選びかを決めるというものである。選択権を獲得した方は松を選び、もう一方は残りの松を受け取る。この儀式では、毎年有名な口上がある。先に選ぶ方は「先に選ばせてもらうておおきにありがとうございます。」と言い、後になった方は「ええ方の松を残しといてもろうてありがとうございます。」と言う。お互いに角の立たない丸く収めようとする心持ちが見て取れる。相手方に謝意を示しつつ、

かつ、どちらの松に対しても、観音信仰や御祭神への崇敬の念を奉る存在として、大事にしていることを表象するものとして解釈することが出来る。嫌味や皮肉でなく、優勝劣敗を示さない気遣いの効いた言い方になっている。

また、祇園祭では「籤取り式」も有名である。その昔、各山鉦町は、「自分の町の山鉦を少しでも早く巡行させたい（できれば先頭）」という思いから、「先陣争い」というのが有ったが、衝突を避けるために、順番を籤で定めるようになった。「前の方がいい」というジंकウスは今も多少残っており、「一番」の籤、順番が早めの籤を引き当てた山の厄除け粽や御守や御札はすぐに授与完了（品切れ・完売）になってしまうという。このように、現代にあっても消え残る「先陣争い」の縁起・^{けん}験・迷信・俗信がある。一方で、籤の結果、順番が後方になった場合のことばもある。「よそさん（前の山鉦・先を行く山鉦）をゆつくり見させてもらいながら行けますわ。ありがたいことですわ」などと和やかに会話する。どんな状況にも価値を見出し、足ることを知り、和を以て貴しとなす、京都の町衆の生きざまである。

京都らしい美意識が、ここにも見られるのである。

※『京ことばとその周辺』（泉文明著、晃洋書房、二〇一二年）参照



イラスト：泉 文明

（次回【第十一回】に続く）



提灯行列とご縁を振り返る

富塚 康幸

この文章が皆さまのもとに届く頃、私はもう龍谷大学の事務職員ではありません。約一年と少しの間、学生部にてお世話になっておりましたが、このたび、私的な都合により大学を離れることとなりました。そんな節目に執筆の機会をいただけたことに感謝するとともに、大学職員として最後の仕事になるかもしれないと思いながら、筆を執らせていただきます。

提灯行列へようこそ！

私が勤務していた学生部は、課外活動支援や奨学金の手続きを担当する部署である。窓口には日々多くの学生が訪れ、相談や各種手続きを行っている。そして私自身も、かつてはその学生の一人だった。学生部との関わりは、大学一回生までしかのぼる。二〇二一年度、コロナ禍でオンライン授業や座席指定などの感染対策が続く中、私は以前から知人が所属していた「創立記念降誕会実行委員会（通称…タンエ）」に参加した。そこで学生部の担当職員の方々と出会い、二回生で財務担当を務めるようになってからは、学生部へ足を運び、メールや電話でも頻繁にやり取りをするようになった。

創立記念降誕会は、浄土真宗の宗祖 親鸞聖人の御生誕と本学の創立記念日を祝う行事である。法要とともに学生主体のさまざまな企画が行われ、多くの人が集う、龍谷大学らしい行事の一つである。

中でも忘れられないのが、二〇二四年に開催された第一〇三回創立記念降誕会である。「陽爛漫」^{ひかりまんまん}をテーマに掲げ、学生生活最後の降誕会として、仲間とともに全力で準備に取り組んだ。映像やポスターなどの制作物を一新し、顕真館では光や音楽を演出に使用したイベントとして「灯」^{あかり}を行い、音系サークルによるコンサートも実施した。



そして、この年の最大の挑戦が「提灯行列」の復活だった。提灯行列は、四十年以上受け継がれてきた龍谷大学ならではの伝統行事である。二〇一九年以来、コロナ禍の影響で実施できていなかったが、「もう一度復活させたい」という後輩たちの思いをきっかけに準備が始まった。

過去の資料を読み返しながら学生部や警察署の方と事前に打ち合わせをし、約十五名の学生スタッフとともに運営体制を整えた。そして迎えた二〇二四年五月十五日の本番当日は、降水確率七十%という予報にもかかわらず、空は何とか持ちこたえてくれた。京都の東山にある円山音楽堂で学生代表としてあいさつをし、私はこう声

を掛けた。

「提灯行列へ、ようこそ！」



創立記念降誕会、再び。

その翌年、ご縁をいただき、龍谷大学の職員として勤務することになった。研修後に告げられた配属先は、まさかの学生部であった。驚きと同時に、不思議な縁を感じたことを今でも鮮明に覚えている。

職員となってからは、「龍谷チャレンジ」や新入生オリエンテーションなどを担当した。特に「龍谷チャレンジ」は印象が強く、学生団体による主体的な挑戦を支える仕事に携わる中で、「やってよかった」「来年度も続けたい」という学生の言葉を聞くと、この仕事のやりがいを実感した。

そして二〇二六年度、創立記念降誕会の担当を任せていただくことになった。今度は職員として携わることになったのである。

学生時代、自分もこのように支えていただいていたのだろうかと思いつながら、警察署への手続きや関係部署との調整を進め、多くの方々の支えを受けて準備を重ねた。

提灯行列の本番である五月十三日は、昼まで降っていた大雨が止み、夕方の円山音楽堂には晴れ間がのぞいた。学生代表のあいさつを見届け、提灯行列は無事に終了した。

学生の頃には見えていなかった、多くの方々の支え。その一つ一つがあつてこそ、この行事は長く受け継がれてきたのだと、職員となつて初めて実感した。



龍谷大学での生活を終えて

今回の執筆にあたり、学生時代の資料を読み返しながら、これまでを振り返った。提灯行列だけでなく、「オーバーナイトハイク」

や「灯」イベントなど、多くの活動を実施することができたのは、職員の皆さま、関係者の皆さま、そして参加してくださった皆さまのおかげである。この場を借りて、心より御礼申し上げたい。

初めて龍谷大学を訪れたのは、私がまだ小学生の頃の龍谷祭だった。思えば、あの日から私と龍谷大学とのご縁は始まっていたのかもしれない。学生として学び、多くの方々に支えていただき、そして職員として今度は学生を支える側に立つことができた。その経験は、私にとって何ものにも代え難い財産である。

「龍谷大学でよかった。」

その思いを胸に、新しい環境へ歩みを進めたい。

最後までお読みいただき、ありがとうございました。龍谷大学に関わるすべての皆さまに感謝申し上げます。



第89回



今回は全国の有名寺院総集合です。
リストの漢字を空いたマスに入れて
寺院の名前にしてください。寺と
院は抜いています。リストに残った
お寺はどこでしょう。

【出題…小川信正】

戒	明	六	羅
剛			
三	三	堂	
			閣
恩			剛
	光	龍	
大		国	
	大		華
通	福		天

漢字リスト

興通千千紀峯金金藥光十天西四分王
円間波蜜銀善蓮安師角井輪覺東知漢

第88回の正解

親鸞聖人面獸心機一轉迷開悟
 前啓後生大事物物見遊山紫水生
 承行雲流水光接天變地異口同明輪
 相苦愛別離苦学力行住座臥音鏡廻
 資行相死一如來大悲歎述薪信止向
 師難思生懷嘗不水發
 大多相衆化教仏乗小心大胆通天願
 教事無我人上然法作儀礼儀過一作
 伝多達婆提菩生後絶前空是即色仏
 別外教仏称是如聞我無法如一身心

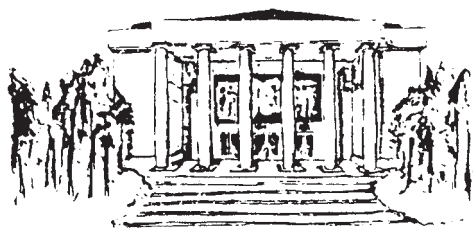
答え：法然上人、伝教大師

★解けた人は答えを今年度中に宗教部(顕真館北側)へお持ちください。
 正解者には記念品をさしあげます。

法要・行事の

振り返り

法要・行事・宗教部の
取り組みの多くは
YOUTUBEで
ご覧になれます。



《二〇二五年》

十月二十一日(火) ご生誕法要

「スマートホン開発の歴史と無線電力伝送で
広がる未来」 石崎俊雄 (先端理工学部教授)

十月二十三日(木) 伝道部朝法話

「またあうひと」 石原洸典さん (一回生)

十月三十日(木) 伝道部朝法話

「偽りの私と仏さま」 金林唯哲さん (一回生)

十一月六日(木) 伝道部朝法話

「ともに在る方」 友岡青慈さん (二回生)

十一月六日(木) 龍谷シネマ

映画「ブルーボーイ事件」特別試写会&スペシャルトーク「男でも女でもなく、私は私です」

飯塚花笑 (映画監督)

中川未悠 (主演俳優)

西田 彩（龍谷大学卒業生）

十一月七日（金） 現代的課題と建学の精神プログラム

「多様性が押し付けられている？」「GBIT+をめぐ
るよくある誤解を解きほぐす」

松岡宗嗣（一般社団法人JARI代表理事）

十一月十三日（木） 伝道部朝法話

「決して漏らすことのない阿弥陀さま」

河野蓮生さん（一回生）

十一月十七日（月） 戦後八十年企画 対談と朗読「戦争記録を伝える」

「龍谷大学戦没者調査について」

新田光子（龍谷大学名誉教授、元図書館長）

「龍谷大学の戦争の記録について」

赤松徹真（龍谷大学名誉教授、元学長）

「龍谷大学卒業生の戦争記録から（朗読）」

浜名実貴（前進座）

十一月二十日（木） 伝道部朝法話

「届けられる安心」玉前 惟さん（二回生）

十一月二十一日（金） ご生誕法要

「龍谷大学で仏教を学ぶということ」

榎屋達也（本学非常勤講師）

十一月二十七日（木） 伝道部朝法話

「救わずにはいられない阿弥陀様」

松原 信さん（一回生）

十二月三日（水） 現代的課題と建学の精神プログラム

「ジェンダーとマイクロアグレッション」

「『悪気なかった』の一言に潜む偏見をなくすために」

竹安栄子（京都女子大学学長）

安藤 徹（本学学長）

松永敬子（本学経営学部教授／前学長補佐）

十二月四日（木） 伝道部朝法話

「弥陀様とのご縁」 富来准也さん（一回生）

十二月八日（月） 現代的課題と建学の精神プログラム

「フェイクニュースに騙されないために」

「ソーシャルメディア時代に必須のファクトチェックとリテラシー」

古田大輔（日本ファクトチェックセンター編集長）

SOGIカフェ

十二月十日（水）

十二月十一日（木） 伝道部朝法話

「生かされている今」松下ゆづりさん（一回生）

十二月十一日（木） 全学人権講演会

「難民の声、家族の歴史から考えた「共に生きる」とは何か」

安田菜津紀（認定NPO法人Dialogue for People

副代表／フォトジャーナリスト）

お逮夜法要

十二月十五日（月）

「お寺の境内案内からみえる「宗教」」

柱本 惇（本学非常勤講師）

十二月十六日（火） ご命日法要

「本を務める（もとをつとめる）」

吉田 叡禮（本学文学部教授）

十二月十八日（木） 伝道部朝法話

「有難い救い」 大谷昭慧さん（一回生）

《二〇二六年》

一月八日（木） 伝道部朝法話

「行き先」 大原寛子さん（一回生）

一月九日（金） SOGIカフェ

一月十六日(金) ご命日法要

「願力無窮にましまして」

玉木興慈(本学文学部教授)

三月二日(月) 現代的課題と建学の精神プログラム

『死の淵からの生還』病氣が教えてくれた「いのち」、
ドナー・医療従事者との関わりを通して」 本学職員

四月九日(木) 伝道部朝法話

「浄土真宗のお寺」友岡青慈さん(三回生)

四月十五日(水) お建夜法要

「龍谷大学と私」ここに響くことば」

三谷真澄(本学宗教部部長)

四月十六日(木) 伝道部朝法話

「阿弥陀さまの願いと約束」北條秀真さん(三回生)

四月十六日(木) ご命日法要

「石ころも黄金に。泥の中でこそ咲く蓮の花。」

志賀浄邦(本学文学部教授)

四月十八日(土) 京都レインボープライド

四月二十一日(火) ご生誕法要

「お念仏とアロハのころ」

山岸昌也(元・ハワイ開教区開教使)

四月二十三日(木) 伝道部朝法話

「おまかせする」藤海眞成さん(三回生)

四月三十日(木) 伝道部朝法話

「ありのまま」玉前 惟さん(三回生)

五月十一日(月) 降誕会朝法話

「お導き」富来准也さん(二回生)

五月十二日(火) 降誕会朝法話

「ただ念仏のみぞ」友岡青慈さん(三回生)

五月十三日(水) 降誕会朝法話

「阿弥陀様の救い」辻 龍樹さん(二回生)

五月十四日(木) 降誕会朝法話

「星とたんぽぽ」中川拓紀さん(二回生)

五月十五日(金) 降誕会朝法話

「出会わせていただいたご縁」

大原義覚さん(四回生)

五月十五日(金) お逮夜法要

「小野清一郎の仏教思想」川元恵史(本学文学部講師)

五月二十一日(木) 創立記念・降誕会法要―記念講演―

大宮「副学長法話」

玉木興慈(本学副学長・文学部教授)

深草「わからなさ」と友達になる」

小山田徹(京都市立芸術大学理事長・学長)

瀬田「弱いロボット」から考える 人・社会・

生きること」

岡田美智男(筑紫女学園大学副学長・教授)

五月二十八日(木) 伝道部朝法話

「真実の観えぬ我ら」川崎逸晟さん(三回生)

五月二十八日(木) SOGICAカフェ

六月四日(木) 伝道部朝法話

「阿弥陀様のお慈悲」河野蓮生さん(二回生)

六月六日(土)・七日(日) 東京レインボープライド

六月十五日(月) お逮夜法要

「かけがえのあるもの」高 宣也(本学文学部講師)

六月十六日(火) ご命日法要

「平安仏教の夜明け―最澄と空海―」

鍵和田聖子(本学文学部教授)

六月十七日(水) 現代的課題と建学の精神プログラム

「性別移行をめぐる医療と社会のリアル」

西田 彩 (龍谷大学卒業生)

石原広章 (石原クリニック院長)

六月十八日(木) 伝道部朝法話

「私が聞かせていただく」佐々木信蓮さん(二回生)

六月二十五日(木) 伝道部朝法話

「お念仏」河名淳哲さん(四回生)

六月二十六日(金) 現代的課題と建学の精神プログラム

『死の淵からの生還』ドナーへの思いと生への罪悪感、そして生きる喜び」 本学職員

七月二日(木) 伝道部朝法話

「つつみこむ阿弥陀さま」松原 信さん(二回生)

七月八日(水) 現代的課題と建学の精神プログラム

「分断を越えて―世界の危機に私たちは何ができるのか―」

三牧聖子 (同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科教授)

清水耕介 (本学国際学部長・教授)

七月九日(木) 伝道部朝法話

「願いに生かされて」松下ゆづりさん(二回生)

七月十五日(水) お逮夜法要

「仏教美術の聖なる怪物」

岩田朋子 (本学文学部教授)

七月十六日(木) 伝道部朝法話

「鏡に映る本当の私」大原義寛さん(四回生)

七月十六日(木) こゝ命日法要

「宗論はどちらが負けても・・・」

藤丸 要 (本学文学部教授)

七月二十一日(火) ご生誕法要

「加工から考える」ものをつくる」ということ」

小川圭二(本学先端理工学部教授)

七月二十二日(水) 現代的課題と建学の精神プログラム

「多様性を結びなおす」

李 琴峰(日中二言語作家、翻訳家、通訳者)

安藤 徹(本学学長)

九月二十一日(月) ご生誕法要

「彼岸からの声―故・杉岡孝紀先生を偲んで―」

打本弘祐(本学農学部教授)

十月三日(土)・四日(日) AIDS文化フォーラム

十月十日(土)・十一日(日) 関西レインボーフェスタ

十月十五日(木) お逮夜法要

『「完璧」ではなく「ほどほど」の育児が子ども

もの自他理解を促す』

東山 薫(本学経済学部教授)

十月十六日(金) ご命日法要

「破戒僧の救済物語―『心性罪福因縁集』を読む―」

崔 鵬偉(世界仏教文化研究センターPD)

十月十八日(日) 報恩講―記念講演―

大宮「副学長法話」玉木興慈(世本学副学長)

深草「〈多様性〉を問いつける旅」

岩淵功一(シドニー工科大学名誉客員教授&ウェネチア大学客員専門研究員)

瀬田「月亭天使のほほえみ寄席」

月亭天使(落語家)

【表紙写真解説】

俵山カレンリー

(グローバル教育推進センター事務部)

慈悲のまなざしを通して他者と出会う

アメリカ合衆国東海岸の比較的のどかな町で育った私は、インドへの留学期間（主にボランティア活動に従事し、現地の言語やヒンドゥー哲学について学びました）を除けば、日本に来るまで仏教について学ぶ機会がありませんでした。それ以来、特に龍谷大学での職務を通じて、他者との関係の中で私たちがどう生きるべきかを考える上で、仏教的なものの見方がどのような哲学を与えてくれるのかについて多くのことを学び、考える機会を得てきました。

なかでも私の心に響いているのは、私たちの人生は他者との出会いによって形づくられていくという浄土真宗の考え方です。私自身の理解では、私たちは決して孤立した存在として生きているのではありません。むしろ、他者との関係や、他者から受け取る慈悲を通して、自分自身を理解していくのだと思います。一見すると些細なことや、思いがけない出来事であっても、すべての出会いには、私たちと世界とのより深いつながりに気づかせてくれる可能性があります。

最近、私はこの考えを具体化するものとして、一枚の写真を大学に寄贈しました。一見すると、少し風変わりな写真かもしれませんが。そこには、二体のLEGOのストームトルーパーが並んで立ち、小さなプライドフラッグとLEGOでできた花束を持っています。この遊び心のある写真が、親鸞聖人の教えとどのような関係があるの

だろうと思われるかもしれませんが。しかし私にとって、この写真には、友情、喪失、つながり、そして思いがけない出会いがその後も私たちの人生を形づくっていくということについての、深い個人的な物語があります。

この写真を考案し、撮影したのは、アメリカ人写真家のジョー・シマンスキー (Joe Shymanski) です。ジョーは、私の大学院時代のクラスメートであり、親しい友人でもあるメアリー (Mary) の兄です。私は日本で数年間暮らした後、大学院で学ぶために、愛しいアメリカ・バーモント州へ戻りました。久しぶりにアメリカで暮らすことになり、環境に馴染むまでの間、どこか「水から出た魚」のような、場違いな感覚を覚えていたことを今でも覚えています。そんな私にとって、メアリーは親切で、温かく、前向きな存在でした。彼女との友情のおかげで、私はその時期、再びアメリカで「自分の居場所」を感じることができました。その後、私はジョーと彼の作品についても知るようになりました。

ジョーはワシントン D.C. で活躍した著名な写真家で、この写真のような遊び心と想像力にあふれた作品から、チベットの第十四世ダライ・ラマをはじめとする、世界的に知られた人物の写真まで、幅広い作品を手がけていました。二〇〇〇年には、ワシントン D.C. のキャピトルヒルに小さな写真スタジオを開き、フライングアート、ポートレート、イベント写真家として本格的に活動を始めました。ジョーの写真は、『Harper's』『Hamptons Magazine』『The Washington Post』をはじめ、全米のさまざまな出版物にも掲載されました。

しかし、悲しいことに、三年前、ジョーはこの世を去りました。彼の死後、家族や友人、そして彼が人生の中で出会い、影響を与え

た多くの人々から、彼への大きな愛情と支えが寄せられました。私はメアリーとその家族を通して、この写真のコピーを受け取る機会を得ました。ジョーの死を知ったとき、私は、深く愛され、尊敬されていた人を失った人々の悲しみを感じました。

けれども、その後この写真について思い返す中で、私はそこに希望のようなものも感じるようになりました。ジョーの仕事は、単に写真を撮ることだけではありませんでした。それは、人を見ること、人と人とのつながりを見つけること、そして、異なる視点から世界を見るよう人々に促すことでもありました。彼の作品には、しばしばユーモア、想像力、そして慈悲の心が込められていました。彼は創作活動を通して、人々が少し立ち止まり、笑い、そして、普段なら当たり前だと思っているものや見慣れたものを、もう一度別の角度から見つめ直すよう促していたのだと思います。彼は教育者としても、世界各地を訪れ、多様な背景を持つ人々との対話を求めた。彼の友人や家族は、「Live Like Joe (ジョーのように生きよう)」というスローガンとともに、今も彼の精神を受け継ぎ続けています。

一見すると、プライドフラッグと花を持つ二体のLEGOのストームトルーパーの姿は、ただ遊び心があり、意外性のあるものに見えます。しかし、そのユーモアの奥には、対話というものの精神と深く響き合うメッセージがあります。それは、異なる世界に生きる存在同士であっても、並んで立つことができるということです。この写真は、私たちとは異なる経験、アイデンティティ、背景を持つ人々を、私たちはどのように迎え入れるのかを考えるきっかけを与えてくれます。

浄土真宗の視点から考えると、対話とは、単に意見を交換したり、自分が正しいことを証明したりすることではないと私は思います。それはまず、自分自身の限界を認め、他者のありのままの現実に関心を開くことから始まります。慈悲とは、私たちが皆同じになることを求めるものではありません。むしろ、違いに対して敬意と謙虚さを持ち、そこから学ぼうとする心をもって、他者と出会うことを可能にしてくれるもののだと思います。

アメリカを母国とし、日本で長年暮らしてきた私にとって、ジョーの作品は、多様性や「共に生きること」をめぐる、より大きなアメリカ社会の対話の一部でもあるように感じられます。アメリカは、さまざまな文化、歴史、アイデンティティを持つ人々が出会う場所であり続けてきました。そうした出会いには、必ずしも容易なものではありません。しかし同時に、それは、人々がより深い理解をもって共に生きる方法を探し続けるきっかけにもなってきました。私自身、アメリカと日本の間を行き来するような人生を送ってきたことで、自分とは異なる人々と出会うことは、時に自分自身に問いを投げかけるものではあるけれど、その一方で、自分が何者であるかについての理解を広げてくれるものでもあると学びました。

この写真に出会う人たちが、その遊び心のある姿を楽しむと同時に、多様性やつながり、そして違いがあっても共に立つことができうる可能性について、少し立ち止まって考えてくれたらと願っています。そして、これからも龍谷大学で仕事を続ける中で、私は自分ができることを通して、文化と文化の間をつなぐ架け橋であり続けたいと思います。出会う人々に心を開き、私たちの人生が思いがけないさまざまな形でつながっていることを忘れずにいたいと思います。

From a Jōdo Shinshū perspective, I believe dialogue is not simply about exchanging opinions or trying to prove that we are right. It begins with recognizing our own limitations and opening ourselves to the reality of another person. Compassion does not require us to become the same. Rather, it allows us to encounter differences with respect, humility, and an openness to learning.

As someone whose home country is the United States and who has spent many years living in Japan, I see Joe's work as part of a larger American conversation about diversity and belonging. The United States has always been a place where many cultures, histories, and identities meet. Those encounters have not always been easy, but they have also inspired people to continue searching for ways to live together with greater understanding. My own life between the United States and Japan has taught me that encountering people who are different from ourselves can sometimes challenge us, but it can also expand our understanding of who we are.

My hope is that others who encounter this photograph will enjoy its playful spirit while also taking a moment to reflect on diversity, connection, and the possibility of standing together despite our differences. And, as I continue my work at Ryukoku University, I hope to keep doing what I can to serve as a bridge between cultures—remaining open to the people I encounter and mindful of the many unexpected ways in which our lives are connected.

outpouring of love and support from his family, friends, and the many people whose lives he had touched. Through Mary and her family, I had the opportunity to receive a copy of this particular photograph. When I learned of Joe's death, I felt the sadness of a community that had lost someone deeply loved and respected.

Yet, as I have reflected on the photograph since then, I have also come to see something hopeful in it. Joe's work was not only about taking photographs; it was about seeing people, finding connections, and encouraging others to look at the world from a different perspective. His images often combined humor, imagination, and compassion. Through his creative work, he encouraged people to pause, smile, and reconsider things that might otherwise seem ordinary or familiar. He also traveled the world as an educator to seek dialog with individuals of various backgrounds. His friends and family continue to keep his spirit alive with the slogan “Live Like Joe” .

At first glance, the image of two LEGO Stormtroopers holding a Pride flag and flowers is simply playful and unexpected. Yet beneath the humor is a message that resonates deeply with the spirit of dialogue: beings from different worlds can stand together. The photograph invites us to consider how we welcome people whose experiences, identities, or backgrounds may differ from our own.

illustration of this idea: two LEGO Stormtroopers standing together, holding a small Pride flag and a bouquet of LEGO flowers. You may wonder what this playful image has to do with the teachings of Shinran. For me, however, the photograph carries a deep personal story about friendship, loss, connection, and the unexpected ways that encounters continue to shape our lives.

The photograph was conceptualized and captured by American photographer Joe Shymanski, the brother of my graduate school classmate and dear friend, Mary. After spending a few years living in Japan, I returned to the beautiful U.S. state of Vermont to pursue graduate studies. I remember feeling somewhat like a fish out of water as I adjusted to being back in the United States. Mary was kind, welcoming, and positive, and her friendship helped me feel at home during that time. In subsequent years, I came to know Joe and his work. Joe was a well-known photographer in Washington, D.C., whose work ranged from playful and imaginative images like this one to photographs of extraordinary individuals, including the 14th Dalai Lama of Tibet. In 2000, Joe opened a small photography studio on Capitol Hill, officially launching his full-time career as a fine art, portrait, and event photographer. Joe's images appeared in Harper's, Hamptons Magazine, The Washington Post, and other national publications.

Tragically, Joe lost his life three years ago. In the aftermath of his death, there was an enormous

Encountering Others Through the Lens of Compassion

Karen Lee TAWARAYAMA

(Center for the Promotion of Global Education)

Having been raised in a relatively rural town on the East Coast of the United States of America, aside from a study abroad period in India (where I spent more time volunteering and learning about local languages and Hindu philosophy), I did not have many opportunities to learn about Buddhism before coming to Japan. Since then, and particularly through my work at Ryukoku University, I have had many opportunities to explore how Buddhist ways of thinking can provide a philosophy for living our lives in relation to others.

One idea that has particularly resonated with me is the Jōdo Shinshū teaching that our lives are shaped through our encounters with others. As I have come to understand it, we do not exist as isolated individuals. Rather, we come to understand ourselves through our relationships with others and through the compassion we receive from them. Every encounter, even one that may initially seem small or unexpected, has the possibility of revealing a deeper connection between us and the world around us.

Recently, I donated a photograph to the university that, at first glance, may seem like an unusual

『ポラリスが降り注ぐ夜』 李 琴峰 著



ちくま文庫
'22年6月9日
858円(税込み)

DE&I(多様性、公平性、包摂性)の推進を最重要課題と位置づけている龍谷大学は、二〇二六年三月に「ダイバーシティ宣言」を発出しました。六月には、従来の「性のあり方の多様性に関する基本方針」を改訂した「性の多様性に関する基本方針」を定めました。そして、「すべてのいのちが尊重され、それぞれの特徴を持ったままに光り輝ける社会」(ダイバーシティ宣言)の実現をめざすための一つのきっかけとすべく、七月に作家の李琴峰さんを深草キャンパスにお招きしての対談イベント「多様性を結びなおす」を開催しました(広報誌『龍谷』一〇二号掲載の抄録をぜひご覧ください)。対談に向けて、私は李さんの作品を読み耽る“李琴峰な時間”を堪能しました。

二〇二一年に『彼岸花が咲く島』(文藝春秋、二〇二二年↓文春文庫、二〇二四年)で芥川賞を受賞した李さんは、デビュー作の『独り舞』(講談社、二〇一八年↓光文社文庫、二〇二三年)以来、性的マイノリティの人(とくに女性)たちの生きづらさをテーマとした小説やエッセイ、紀行文、評論文などを意欲的に発表してきました。いずれも、知性と感性のバランスが絶妙で、美しさと鋭さを兼ね備えた表現と独創的かつ魅惑的な内容、そして学ぶべき知識と考えるべきテーマ

に満ち満ちた世界が創造されています。そのなかからあえて一冊だけ「お薦め」するならば、『ポラリスが降り注ぐ夜』でしょうか。この作品は、新宿二丁目のレズビアンバー（ポラリス）ですれ違う七人のクイア女性（レズビアン、トランスジェンダー、アロマンティック、アセクシユアル、バイセクシユアル、パンセクシユアルなど）が登場する連作短編集で、「国籍も、世代も、操る言葉も、セクシユアリティも、生の歴史也大いに異なるセクシユアル・マイノリティの女性たち」（李琴峰『透明な膜を隔てながら』一二九頁、早川書房、二〇二二年）の交錯する複雑な人生を、社会や政治・制度などの問題とともに複雑なままに繊細に描いた小説です。

とにもかくにも小説は実際に読み味わい、愉しむに如くはなし。ここでは「ネタバレ」を避けつつ、珠玉の表現世界からとくに印象的なことばをほんの少しだけ紹介します。「異質の存在を無視し、異質の声を掻き消す。それがあなたの言うところの大局的な視点？」（六十五頁）、「何でも名前をつけて、カテゴライズする必要はないんじゃないかな」と反論した。すると利穂は、「カテゴライズされることで自分自身の存在に対する安心感が得られるのなら、してもいいんじゃないかな？　だって、言葉がないのはあまりにも心細いんだもの」と静かに言った」（九十七頁）、「私達はずっとここにいるの。常に複数形で、いるのよ。夏子はナラのこの言葉と、その顔に浮かんでいた小さく儂げな笑窪を思い出した。ナラがいなくなっても、ここには「私達」がいる。誰がいなくなっても、ここには誰かがいる。複数形は、つまり代替可能ということ。しかし、単数形としての生と歴史も、きちんと覚えられているべきではないか、と夏子は思った」（二六一頁）……。わずかな引用からも、文学とは「問いを投げかける」ものであり、小説に「現実を動かす力はないのだ

けど、人々を立ち止まらせて現状についても一度考えさせる力はある」(『透明な膜を隔てながら』三五九―三六〇頁)という李さんの信念がたしかな感触をもって伝わってきます。

なお、ピアンバー(ポラリス)(と店主の夏子)は李さんのほかの作品にも登場します。ポラリス(北極星)の周りをめぐるのは、北斗七星だけではありません。闇夜に煌めくさまざまな星々の物語もぜひ読んでみてください。小説を愉しみつつ、多様でインターセクショナルなマイノリティたちの生きづらさを知り、学ぶかけがえのない時間を、みなさんにも経験してほしいと願っています。

【学長・安藤 徹】

『歎異抄』成立の謎 塩谷菊美 著



法蔵館
'25年12月15日
3,300円(税込み)

本書は、浄土真宗の宗祖親鸞の言行録として有名な『歎異抄』の成立過程について、中世の信仰形態と本願寺教団の成立という歴史的視座から検証した一冊です。

本書が注目するのは、「人民」のための仏教が当時の社会でどのように受け入れられていたかという実態です。文字を読めない多くの民衆にとって、仏教は難解な書物を通じてではなく、身近な指導者の「声」を通して学ぶものでした。厳しい現実の中で確かな救いを求めた結果、民衆は指導者を「生き仏(生き如来)」として頼るようになります。本書は、この民間信仰が、結果として指導者と信徒の間に絶対的な上下関係を生み出していったプロセスを丁寧

追っています。さらに著者は、覚如を中心とする本願寺教団が、各地に複数存在した「生き如来」を親鸞ただ一人に絞り込み、教団の正統性を確立していく過程で『歎異抄』が編まれたのだと指摘します。

合理的な価値観のみで歴史を語ろうとすると、難解な書物に潜む論理的思想体系を明らかにすることが高尚なこととして評価されがちです。その一方で、史実に基づかない事象や、非論理的な民間信仰の実態を記したテキストは一段低く見られ、これまで十分な光が当てられてこなかったのも確かでしょう。

しかし本書は、そうした整然とした論理の枠組みからこぼれ落ちる泥臭い信仰の実態にこそ、中世の人々の真の姿が宿っていることを教えてくれます。『歎異抄』を、現実の社会から切り離された論理的な思想書としてではなく、民衆の切実な願いと教団の組織化という現実のプロセスの中で生み出された「歴史の産物」として捉え直す視点は、読者自身が現代世界を捉えるための確かな視座をもたらししてくれます。親鸞や浄土真宗に関心のある読者のみならず、日本の宗教観や、本願寺教団の形成過程に興味を持つ人に新たな視座を与えてくれる一冊と言えるでしょう。

【宗教部・都河陽介】

『多様性とうき合うか——違和感から考える』

岩波功一 著



岩波新書

'25年12月19日
990円(税込み)

「多様性」と聞いて、どう感じますか？

ここ数年、多様性もしくはダイバーシティという言葉がよく耳にするようになりました

た。多様性を奨励、多様性を受け入れようという一見ポジティブな意見と、多様性と言い過ぎていて、多様性なんて面倒くさい、そんなあからさまにネガティブな意見も見ます。私はこの一見ポジティブな意見も含めてモヤモヤとした気持ちを抱いていました。

多様性ってどういうことだろう？ そう感じた時に出会ったのがこの一冊です。

本書では日本とオーストラリアを往来した著者が感じた多文化共生を軸に、ジェンダー、LGBTQ+、障がい、人種、様々な視点から多様性を見つめなおし、多様性が奨励されることの意味を探ります。多様性が奨励され、それに対して息苦しさを感じる声も上がる中、本当に見つめなければいけないのは多様性の根本的な意味を考えることなのだと感じながら読んでいました。

著者は「多様性の奨励が肯定的に促されることへの違和感から、それが差異をめぐる差別・不平等の解消を目指す取り組みから外れてしまっていることを批判的に検討」（二四八頁）しています。

「最大の目的は、どういう言葉を使うのかではなく、どのようなにして差異をめぐる差別や不平等の解消に向けた実践を社会に根付かせていくか」（二四八―二四九頁）

「多様性」と聞いて面倒くさいからもういいよと思う方、私のようにになにかモヤっとする気持ちがある方、この本の中に「正解」はありませんが、一緒に多様性について語るきっかけにしてみませんか。

【宗教部・猪越未来】

『ナチスに抗した若者たち その生き方を問う』

岡 典子 著



筑摩書房

'26年6月15日

1,980円（税込み）

この本の表紙には、一隻の海賊船が描かれている。いったいこの絵は何を意味しているのだろう。そんな疑問を抱きながら読み始めた。第一次世界大戦で敗戦国となり、経

済が疲弊し、閉塞感が漂っていたドイツにヒトラーが現れ、人々が熱狂した……。第二次世界大戦当時のドイツについて、私はそんなイメージを持っていた。だからこそ、ナチス政権下のドイツで、ナチスに不信感を抱き、抵抗や反抗の意思を示した若者たちがいたことに驚かされた。ナチスの命令に背けば、発覚した場合、密告され、逮捕され、強制収容所への収容や死に至る危険さえあった。それにもかかわらず、なぜそうした若者はビラを配り、落書きをし、秘密の勉強会を開くなどの行動に踏み出したのか。本書が問いかけるのは、まさにその「なぜ」である。

もちろん、自らの意思や経験から行動を起こした人もいる。しかし、家族や教師、友人とのつながり、自由を求める気持ち、あるいは自分が置かれた社会的な環境への反発など、さまざまな要因が重なって行動に至った人もいた。つまり、その若者たちの生き方を単純に「勇気ある人たち」と片づけていいのかどうか。もし違う環境に置かれていたなら、ナチス体制に協力する側に回っていたかもしれないし、あるいは、別の形で反発していたかもしれない。本書を読むと、

そんなことまで考えさせられる。

表紙に描かれているのは、ケルン・エーレンフェルト駅の高架下にある、エーデルワイス海賊団を題材にした壁画である。エーデルワイス海賊団は、ナチス体制に対する抵抗活動を行った若者グループの一つ。壁画には、船に乗った若者たちと、その前を、列をなして進む制服姿の兵士たちが描かれている。船には、自由を求める若者たちの姿が重ねられ、一方、兵士たちは一人ひとりの個性が消された存在として描かれている。本書では、エーデルワイスは「自由の花」として登場する。エーデルワイス海賊団という呼称は、雪や氷に覆われた山に咲く美しい花のように、何ものにも束縛されずに生きたいという願いを象徴するものだったのだろう。では、この絵が表している世界は、本当に過去のものなのだろうか。近い将来、もし私たちの社会が、自由にものを考え、発言し、行動することが難しい状況になったとしたら、そのとき私は、果たしてエーデルワイスの側に立つのだろうか。それとも、表情を失った兵士の側に立つのだろうか。

当時のドイツの若者たちは、特別な英雄だったわけではなく、悩み、迷い、仲間と語り合いながら、その時代を生きた普通の若者たちである。だからこそ、その姿は遠い過去の出来事としてではなく、現代を生きる私たち自身の問題として迫ってくる。当時のドイツの若者たちと、現代を生きる私たちを重ね合わせながら、ぜひ読んでほしい一冊である。

【宗教部・安食真城】

編集 後記

七月の熊本地震や八月の千葉豪雨をはじめ、今年も多くの自然災害が発生いたしました。被害に遭われた皆様に心よりお見舞い申し上げますとともに、一日も早い復興と日常の回復を念じております。こうした状況のなか、今年も『部報りゆうこく』を発行できましたのは、ご執筆いただいた皆様ならびに読者の皆様による温かいご支援の賜物です。

今号の表紙を飾るのは、グローバル教育推進センター事務部の俵山カレンリーさんです。胸に抱かれているのは、ご友人の兄であるジョーさんが撮影した一枚の写真。「異なる世界に生きる存在同士であっても、並んで立つことはできる」というジョーさんの願いが込められたその写真と、それに深く共鳴する俵山さんの姿に宗教部一同が心を打たれ、表紙へのご出演をお願いいたしました。

また、「Book Guide」のコーナーでは、安藤徹学長より李琴峰さんの著書『ボラリスが降り注ぐ夜』をご紹介いただいております。多様なマイノリティの方々の「単数形としての生と歴史」に思いを馳せる熱のこもった書評は、社会のあり方について深い気づきを与えてくれます。

多様性と共生は、本誌を貫く大切なテーマです。今後も龍谷大学における多様な学生・教職員の活動をお届けしてまいります。秋気深まる折、本誌が皆様の心に灯りをとます一冊となれば幸いです。

合掌

YouTube



X



Facebook



Instagram







しゃか たんじょう いわ はな かんぶつ え おみな さが
お釈迦さまの誕生をお祝いする花まつり(灌仏会)でキャンパスのなかは大盛況！
ひだりの絵と同じ阿弥陀さまがどこかにいるよ！探してみよう！

